



「時事漫画」と保険

稲 葉 浩 幸

概要 1867年に福沢諭吉の『西洋旅案内』によってわが国に近代的保険制度が初めて紹介された同じ頃、「ポンチ絵」と呼ばれる諷刺漫画が読者の人気を博していた。なかでも近代漫画の祖とされる北澤楽天が担当した「時事漫画」は、『時事新報』から独立した初の新聞日曜漫画版として新たなジャンルを確立した。

「時事漫画」の中で、北澤楽天は当時の保険業界の実情を踏まえた上で、火災保険や生命保険、保険勧誘員、保険診査医など様々な視点から近代保険制度に翻弄される人々をユーモラスに描いている。保険に関する北澤楽天の洞察力は鋭く、黎明期のわが国の近代的保険制度を知る上で、価値ある史料となっている。

キーワード 時事漫画、保険、諷刺漫画、時事新報、北澤楽天

原稿受理日 2020年9月1日

Abstract When the modern insurance system was first introduced to Japan by Yukichi Fukuzawa's "Seiyō Tabi Annai" in 1867, the satirical cartoon called "Ponchi-e" was popular among readers. As the ancestor of modern manga, Rakuten Kitazawa created "Jiji Manga." He established a new genre as the first Sunday newspaper cartoon version that became independent from "Jiji Shimpo."

In "Jiji Manga," Rakuten Kitazawa humorously portrayed the insurance industry at that time from various perspectives such as fire insurance, life insurance, insurance agents, and medical examiners. He had a keen eye for insurance, and his works serve as valuable historical materials for learning about the early days of Japan's modern insurance system.

Key words Jiji Manga, Insurance, Satire Cartoon, Jiji Shimpo, Rakuten Kitazawa

I は じ め に

わが国で初めて保険会社が設立されたのは1859年のことである。ただし、これは横浜の外国人居留地で外国保険会社が外国人を対象に営業したものである。その後、1867年に福沢諭吉の『西洋旅案内』の中の「災難請合の事 イシュアランス」において、生命保険・火災保険・海上保険といった近代的保険制度がわが国に初めて紹介されると、1879年に東京海上、1881年に明治生命、1887年には東京火災が設立され、日本の保険業界は黎明期を迎えることとなった。

同じ頃、新聞や雑誌の世界では「ポンチ絵」と呼ばれる諷刺画が紙面を賑わすようになる。「ポンチ絵」のポンチとは、当時来日していたイギリス人記者のチャールズ・ワーグマンが1862年に横浜で創刊した漫画雑誌『ジャパン・パンチ』に由来する。『ジャパン・パンチ』は幕末から明治初期の激動の日本をユーモラスな諷刺漫画で世界に配信して話題となった。その影響を受けて、1880年代になるとわが国でも諷刺漫画を活用した雑誌や新聞の刊行が相次いだ。1882年に福沢諭吉が創刊した『時事新報』は、当時の新聞には珍しく特定の政党に傾くことのない中立新聞として東京五大新聞の一角を成したが、読者にわかりやすく情報を伝えるため、「ポンチ絵」や「おどけ絵」と呼ばれた諷刺画を多用した。1899年に北澤楽天が『時事新報』の漫画を担当するようになるとさらに人気を博した。

北澤楽天について、清水勲による北澤（2001c）の解説には次のように記載されている。

北澤楽天（一八七六—一九五五）は埼玉県大宮の幕府とゆかりのある名家に明治九年に生まれている。一二歳の頃から洋画そして日本画の修行をし、一六歳の頃、横浜でオーストラリア出身の漫画家フランク・ナンキベル（一八六九—一九五九）から西洋漫画の指導を受ける。かくして、楽天は横浜居留地で漫画を描き出し、その才能が福沢諭吉の目にとまり、明治三二年、時事新報に移って漫画記者として活躍しだす。最初は政治諷刺漫画、社会諷刺漫画を描いていたが、明治三五年より毎日曜日に「時事漫画」欄が設けられ、その担当をまかせられる⁽¹⁾。

この日曜版の「時事漫画」は大人気となり、1921年には『時事新報』から独立し、日本で初めての新聞日曜漫画版となり、何回か改題した後、1932年に終刊となった。北澤楽天

(1) 北澤（2001c）p.2。

幕末から明治にかけての日本は、文明開化により西洋の文化・風俗が入ってきたことによって、庶民の生活スタイルは一変した。新しい生活様式や思想、制度が急速に広まる中で、「時事漫画」は庶民の暮らしや考え方の変化を、ユーモアを交えた漫画で諷刺した。その題材として、生命保険や火災保険といった人々の生活に密着した保険は、話題に事欠かなかったようで、多くの作品が残されている。そこで、本稿では北澤楽天の「時事漫画」に焦点を当てて、当時の保険をめぐる状況について時代背景とともに考察していきたい。

北澤楽天が「時事漫画」を手掛けるようになったのは、1902年1月のことである。その年の3月23日と6月8日の「時事漫画」に、それぞれ「寫生帖」と題して保険を題材にした漫画が掲載された。

寫 生 帖



寫生帖



出典：北澤（2001a） p.25。

(2) 諷刺画や漫画の歴史的な経緯については、竹内（2020）pp.48-64を参照。

図1の「寫生帖①」では、濛々と煙が立ち上る火災現場で2人の男が話している。火事見舞いに来た人が、類焼した高利貸しに向かって、「でもまあ住宅の方には保険が付いていましたようですが、どうもお袋様をご焼死あそばしたそうで、誠にはやご愁傷様で…」とお悔やみを述べると、強欲な高利貸しは「いえ、あのお袋にも十分保険が付いていました」と答えた。

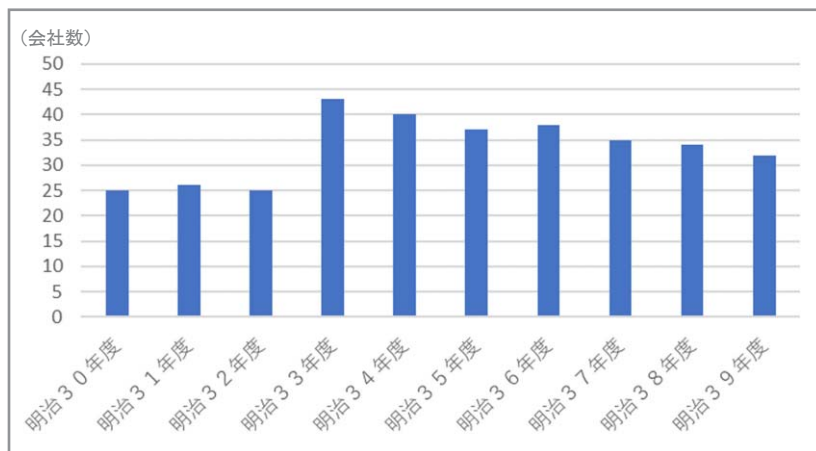
ここで住宅の方に付けられていた保険とはもちろん火災保険のことである。この漫画が掲載された当時のわが国の火災保険の現状は、1895年の日清戦争の勝利を契機に、企業熱が活況となり、1895年から1902年の7年間で火災保険会社が18社も設立された、いわゆる第二次乱設時代であった。保険会社間の過当競争が激しさを増す中で、火災保険に加入する件数も増加していた時代である。

一方、お袋に付けられていた保険とは生命保険のことである。火事見舞いの男の「住宅の方には保険が付いていた」という言葉を受けて、「お袋にも十分保険が付いていた」というオチとなる訳だが、強欲な高利貸しにとっては、親の死も住宅火災もどちらも金勘定の話となってしまうところに、落語的なユーモアと諷刺が込められている。

また、生命保険については図2の「寫生帖②」でも採り上げられている。

「寫生帖②」は鈍助と吉兵衛という2人の登場人物の会話から話が見えてくる。鈍助が「吉兵衛さん、おらが隣の奎兵衛さんは旨い事をしたぜ」と言うと、吉兵衛は「へー何を」と問い返す。すると鈍助は「あの人の掛けていた生命保険がつぶれる3日前に死んで、まんと五千円の保険を取りました」と答えている。

図3 生命保険会社社数の推移

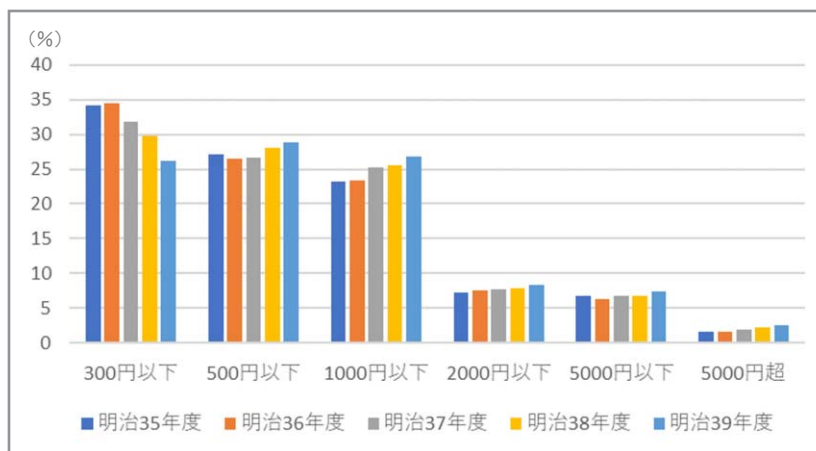


出典：由井・田付編（1981）p.519より作成。

当時の生命保険会社について見てみると、火災保険と同様に日清戦争景気に沸いて新設会社が増えた時期である。図3は、1897年から1906年度までの生命保険会社の会社数の推移である。グラフでは、明治30年度から32年度の3年間は会社数が25社ほどで推移していたが、明治33年度には43社となっており、急増していることがわかる。しかし、飽和状態となった生命保険会社の中には経営基盤が脆弱な会社も多く、倒産する会社も少なくなかった。

そうした状況下で、5,000円という保険金を得たわけではあるが、当時の5,000円という保険金はどのくらいの価値があったのであろうか。図4には明治35年度から39年度の死亡保険金額別新契約件数構成比の推移が示されている。グラフから、構成比では300円以下から1,000円以下の合計で約8割を占めていることがわかる。当時の物価として、明治33年頃の大卒初任給が23円の時代である。それが年収の10倍以上の保険金となればかなりの高額であったと思われる。

図4 明治35年度～39年度までの死亡保険金額別新契約件数構成比の推移



出典：由井・田付編（1981）p.547より作成。

なお、図2では「生命保険がつぶれる3日前に死んでまんまと五千円の保険金を取りました」とあるが、これによると死亡してから3日以内に保険金が支払われた計算となる。保険会社の素早い対応とも言えるが、わが国で初めて生命保険が支払われた人物として知られる川井久徴の場合を例に見てみると、1882年1月20日に死亡してその1週間後の1月27日には遺族へ1,000円が支払われたという記録がある⁽³⁾。

(3) 生命保険協会 <https://www.seiho.or.jp/meiji/pdf/data.pdf> を参照。

現在の保険契約においても、原則として保険会社に書類が届いてから5営業日以内に支払われると明記されており、創業当初から保険金の支払いを迅速に行っていたことがわかる。

また、同年8月17日の「時事漫画」には、「商賣道に依て賢し」というタイトルで、弁護士、生命保険勧誘員、火災保険勧誘員、葬儀社の手代、慈善会の幹事、山の案内者の6つの職業が登場する。タイトルの「商売は道によって賢し」とは諺であり、「商売をする人は自分の商売については何でも知っている」という意味である。

図5 商賣道に依て賢し

し 賢^{さか}て 依^よに 道^{みち} 賣^う 商^{しやう}

出典：北澤（2001a） p.33。

まず、図5の右中段の（二）生命保険勧誘員を見てみると、水の中に落ちて今まさに救助されている人に対し、生命保険勧誘員が「それどうです。何時どんな怪我で命を亡くさないとは限りませんから保険にお就きなさい」と言って、「生命保険のすすめ」と書かれた冊子を渡そうと手を伸ばす姿が描かれている。

次に、右下段の（三）火災保険勧誘員では、類焼した家の主人が必死で逃げ出しているところへ火災保険勧誘員が「寸善尺魔こんな事があるから先日来お勧め申した訳さ。今度焼跡へご新築の上は是非保険について下さい」と言うのと、主人は後ろ手に燃えている家を指差して「今此の家はつけられまいか」と尋ねる。

寸善尺魔とは、世の中には良いことがほんの僅かで、悪いことの方が多いという意味の四字熟語であるが、この2人の保険勧誘員はどちらも、人が災難に見舞われるのを待ち構えていたかのように現れて、保険契約を結ぶよう勧誘している。それは保険勧誘員に限らず他の職業についても同様で、こうした人の弱みに付け込むような抜け目のない商いのやり方を、北澤楽天は「商賣道に依て賢し」という諺を使って皮肉っているのである。

また、1903年9月27日の「長命な親」と題した図6の漫画では、生命保険会社の検査医が保険希望者の検査を終わった後、「あなたのご両親は若しご存命ならお年齢はおいくつですか」と問うと、被保険者は「エエと父は百十二で母は百と二ツです」と答える。すると検査医は驚いて「エッどうも御長命ですな、それじゃ貴君もご長命でしょう。会社には誠に好いお得意です」と感心すると、被保険者は「もし貴君は何かお間違えじゃありませんか。両親は五十年前に死にました。もし存命ならその通りですが」と訝しげに言った。

図6 長命な親



出典：北澤（2001a）p.89。

当時の保険契約時の診査医について、明治生命によると「明治生命は創業以来保険契約の締結に際して医師の審査を実施してきたが、日清戦争ごろまでは社医を中心としていた。(中略)しかし募集方法の変化にともない、社医、臨時嘱託医および地方出張診査医をもっては、保険契約に対応できなくなった。かくて明治二十七年二月初より、嘱託医制度を本格的に併用しはじめた」⁽⁴⁾とあり、さらに明治27年度末時点で171人であった嘱託医の人数は、5年間で502人にまで増加したという⁽⁵⁾。

また、明治後期の生命保険契約に関する医師の診査について、米山(2017)では当時の状況について次のように述べている。

現在のわが国の医的診査では、遺伝情報は扱わないことになっている。明治後期の「診査内規」では、診査医は、受検者の血族の病歴をはじめとする遺伝関連情報を綿密に問診することが期待されている。血族者の生存死亡及其病歴并本人の既往病歴及現在の自覚等は保険申込書に記載があるが、診査医はさらに詳細に「問尋を遂げ」ることが期待されている⁽⁶⁾。

これによると、保険申込書の中に血族者の生存や死亡、その病歴について書く欄があるにも関わらず、診査医にはさらにそれらの情報について問診することが期待されているということだ。つまり、「長命な親」の検査医が知りたかったことも、被保険者の両親が今も実際に生きているのかどうか、そして生きているのならば何歳なのか、ということである。しかし、被保険者は、「ご両親がもし存命ならば」という検査医の問いを、50年前に亡くなった両親がもしも今も生きていたとするならば何歳なのかと聞かれたと思い、計算をして答えたわけである。2人が「もし存命ならば」という言葉の意味を取り違えているところに、この漫画の面白さがある。

宮地(2005)によると、「昭和49年までわが国の告知書には、実父母、実子、配偶者についての家族歴の欄が設けられていたが、現在は業界の自己規制により情報収集されていない」⁽⁷⁾とあるように、約50年ほど前までは遺伝的なリスクを避ける目的で当事者以外の情報を開示することが求められた。

(4) 日本経営史研究所編(1981) pp.81-82。

(5) 日本経営史研究所編(1981) p.82を参照。

(6) 米山(2017) p.11。

(7) 宮地(2005) p.112。

なお、「長命な親」というタイトルであるが、安井・安井（2008）で「1902（明治35）年に発表された第1回生命表の平均寿命が43～44年だった」⁽⁸⁾ということを考えれば、漫画の被保険者の両親がもし存命であれば父が112歳、母が102歳であり、それが50年前に死亡したとしても、その時の年齢は父62歳、母52歳となる。当時の平均寿命から考えると、被保険者の両親はやはり「長命な親」といえるのではないだろうか。

Ⅲ 大正期の「時事漫画」に描かれた保険

「時事漫画」で順調に職業漫画家としてステイタスを確立していった北澤楽天であるが、1905年（明治38年）にわが国初のフルカラー漫画雑誌『東京パック』を創刊すると、「時事漫画」から離れて活躍の場を広げた。けれども、1912年の『東京パック』終刊後に自らが出版社を立ち上げて創刊した『楽天パック』『家庭パック』の2誌が振るわず、どちらも1年3カ月ほどで廃刊になると、北澤楽天は『時事新報』に復帰し、再び「時事漫画」を自身の漫画執筆活動の中心に据えた。

1914年11月2日には「屈み女に反り男」と題して図7のような漫画が掲載された。

図7 屈み女に反り男



出典：『時事新報』1914年11月2日 p.5。

(8) 安井・安井（2008）p.172。

山高帽を被ってふんぞり返る小柄な男性と、その半歩後ろを俯きながら腰を屈めて歩く大柄な女性の絵に、「屈み女に反り男 アラマアお似合いなご夫婦ですこと！」と題されたこの漫画は、男性が悲観して考えた4つの場面で構成されている。その最初の1コマ目に保険が登場する。目の前で車に轢かれた人を見て、男性は「何という間が好いのだろう。私は十年間も傷害保険に入っていてみんな掛金損だ」と悔しがる。寸でのところで事故を免れたのにも関わらず、悲観して頭に思い浮かぶのは、10年間掛け続けてきた傷害保険をもらうことが出来ず、掛け金が無駄になってしまうということである。その他の3つの場面においても、「美味しい料理をご馳走になる」「美しい紅葉を見る」「叔父の遺産を相続する」と本来喜んで然るべき事柄なのに、悲観することによって、マイナス面ばかりを想像してしまっているのだ。

また、保険について言えば、日本人はそもそも貯蓄志向が高いと言われ、近年までは保険の種類も掛け捨てタイプよりも積み立てタイプの方が好まれる傾向にあった。明治期に欧米から入ってきた近代的保険は、死亡や火災など万が一起り得る様々なリスクへ備えるための保障・補償費用として保険料を支払う制度であり、幸運にも保険事故が発生しなかった場合には保険料は戻ってこない。だが、貯蓄志向の高い日本人にはこれを損だと考えてしまうきらいがある。

次に、図8の「入撰保険」というタイトルの4コマ漫画を紹介する。登場人物は洋画家と保険屋の2人である。洋画家のもとへ生命保険の勧誘に何度も通っていた保険屋は、ある日、文展へと出品する作品を見て「いよう大傑作！入撰疑いなしだ」と誉めそやす。気を良くした洋画家へ保険屋はここぞとばかりに「入撰どころか二等賞請け合いです。ところで先生の生命保険を」と勧誘するが、洋画家は「イヤ入撰したら付けましょうよ」と答える。すると保険屋は「有難い。私が先生の画に入撰の保険をつけて、入撰したら先生が生命保険について下さるのですね。すこぶる結構」と満足げに言い、雨の中ビショ濡れになって搬入を手伝った。ところが審査発表の新聞を見ても洋画家の名前がないのを不審に思い、慌てて駆けつけると、洋画家は「君の入撰保険は当てにならないから生命保険も断るよ!!」とすっかり形相も変わって、怒りを顕にするのであった。

この漫画に登場する保険屋は図5の「商賣道に依て賢し」に登場する2人の勧誘員とは異なり、愛嬌のあるキャラクターとなっている。先の勧誘員たちは災難に見舞われている人に向かって「それ見たことか」「だから言ったでしょう」と強気な姿勢で勧誘しているのに対して、この保険屋は洋画家の絵を褒めたたえてその気にさせ、さらには雨の中ビショ濡れになって搬入まで手伝っているのである。それだけ契約を取るために必死なのだ。

図8 入撰保険



出典：北澤楽天（2001b）p.112。

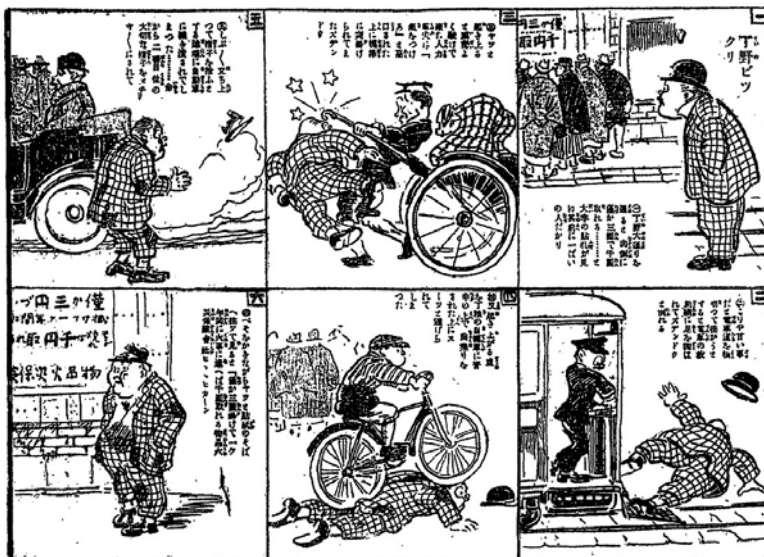
結果としては、落選した洋画家に火を吐くような凄まじさで契約を断られるわけだが、そもそも保険屋が絵に入選の保険をつけて、入選したら洋画家が生命保険に入るという可笑な条件に満足し、それが叶うと信じているような男だ。間抜けな役回りだが、憎めないキャラクターである。

キャラクターと言えば、北澤楽天の功績のひとつとして、様々な諷刺の効いた登場人物たちを生み出したことが挙げられる。1915年に連載が開始された「丁野抜作」シリーズは北澤楽天の人気キャラクターとして有名である。「丁野抜作」は失敗を繰り返すダメ男であるが、その作品の中に保険が登場する場面（図9参照）がある。「丁野ビックリ」というタイトルのこの漫画の中で、丁野は大通りの向こう側に「僅か三円で千円取れる…」と大きな字で書かれた貼紙の下に、たくさんの人だかりが出来ているのを見つける。「こりゃ甘いことだ」と急いで向かおうとすると、路面電車の救助網に足を拘われたり、人力車の

横棒に突っかけられたり、丁稚の自転車に踏まれたり、命の次に大切な帽子を自動車に轢きつぶされてしまったりと散々な目に遭う。ペソをかきながらやっと貼紙の前に辿り着くと、「僅か三円掛けて一ヶ年間に火事に逢えば千円取れる物品火災保険会社」と書かれた広告であった。

ここにある物品火災保険会社とは、いわゆる動産を補償の対象とした火災保険会社である。わが国では1893年に東京火災物品（1897年に家屋物品火災に改称）、東洋物品火災、1898年に東京物品火災（1914年に日本動産火災に改称）がそれぞれ東京で営業を開始している。「丁野ビックリ」の物品火災保険会社とは年代が異なるが、1897年4月14日の『東京朝日新聞』に「火災安心金溜法」と題して東京火災物品保護株式会社が広告を掲載しているので比較してみたい。

図9 丁野ビックリ



出典：北澤楽天（2001b）p.133。

図10を見ると、広告は「世に火災程おそろべき者はなし昨日の富者も今日は乞食とのことあり我社は此大難を免かれ此度金を溜るの法を設けたり是計は寸分もうそ偽りなし」という文章で始まり、さらに「日掛け火災保険」の説明として次のように記載している。

○我社は借家人にても雇人職工にても毎天一銭づゝの掛金より家財物品の保険と積金とを兼ねたる他に類なき金溜法を設く

保険料	焼けたる時は	焼けざる時は三年目に
毎日本一銭掛	廿五圓渡す	十圓返す
毎日本二銭掛	五十圓渡す	廿圓返す
以上此割合又半途にて解約割戻しをも承諾す		

1897年当時、コーヒー 1 杯が 2 銭という時代である。日掛けて 2 銭ずつ支払った場合、火災に遭って家財が焼けた時には 50 円、また火災に遭わなかった時には 3 年目に 20 円が支払われるという内容である。「丁野ビックリ」では、3 円掛けて火災にあった時には千円が支払われるとしか書かれていないが、当時の動産火災保険では、このように契約者が火災に遭わなかった場合には返戻金を支払うことを明記している例が多く、貯蓄志向が高く、掛け捨てを嫌がる人々に人気があった。

図10 東京火災物品保護株式会社の新聞広告

出典：『東京朝日新聞』1897年4月14日 p.4。

さらに、疋田（1938b）では当時の動産火災保険会社の状況を次のように記している。

明治三十一年創立された東京物品火災は、大正三年更生して日本動産火災となり、歐洲戦役中は社會大衆の好景氣を反映して、小口簡易保険は良好な成績を擧げて居つた。然し何時までも日本動産のみが月賦制度の大衆保險を獨占する事は許されなくなつて、大正七年に二つの同種類の會社が設立された。大阪に日本簡易火災、東京に東京動産即

之れである。(中略)

此兩社に見る如く小口動産火災は普通火災保險會社が、統制紊れて四苦八倒を續けて居るに拘らず極めて良好な成績を擧げて居る⁽⁹⁾。

これによれば、一般的な火災保險が苦戦する中、日本動産火災を始めとする小口簡易保險は、第一次世界大戰による好景気を背景に業績を伸ばしていたとある。「丁野ビツクリ」の1コマ目で、物品火災保險の大きな貼紙の前にたくさんの人々が集まっていたが、当時はこうした小口の火災保險が大衆に受け入れられていたのである。

また、日本動産火災が營業を開始した1914年には、第二次大隈内閣によって官營の小口保險制度の導入が決定されたが、印南編（1966）では当時の小口保險をめぐる状況について次のように記述している。

大正三年四月成立の第二次大隈内閣は、社会政策の一端として小口保險官營の実行を決定し、同年五月内閣に小口保險制度調査委員会を設置して直ちに調査に着手し、同年一二月には簡易生命保險法案の内容が公表されるにいたった。官營実施の理由としては、基礎の強固、非營利、経費の節約、事業の普及の四点をあげ、さらに無用の競争を避けるため民營との併行を認めず政府の独占とすることとした。生命保險会社協會は、当時まだ民間会社にも小口契約の件数が多く、小口保險官營の民業に与える影響の大きい点を指摘し、猛烈な反対運動を展開したが、大正五年二月簡易生命保險法案は議會に提出されるにいたった。法案の議會提出後も民業側の反対はつづけられたが、けっきょく原案の最高保險金額三〇〇円を二五〇円に引下げて修正可決され、官營の簡易保險は同年一〇月から実施となった⁽¹⁰⁾。

この大正5年（1916年）に実施された官營の簡易保險というのが、現在は民営化されている株式会社かんぽ生命の起源である。新しく官營の小口保險が出来るというニュースは当初から話題となっていたようで、1914年5月28日には『時事新報』の政治欄の真ん中に、「いろいろな註文あり」というタイトルで北澤楽天による漫画が掲載されている。

(9) 疋田（1938b）pp.214-215。

(10) 印南編（1966）p.75。

図11 いろいろな注文あり



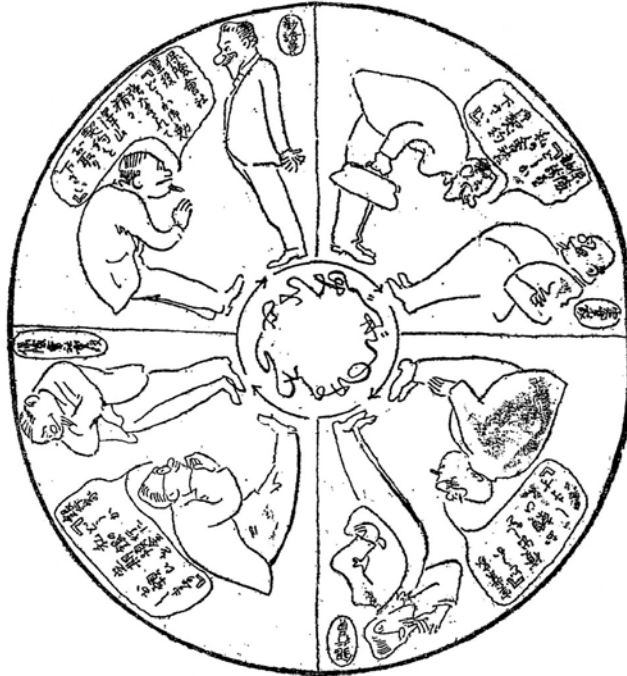
出典：『時事新報』1914年5月28日 p.3。

図11を見ると、3人の男が煙管を片手に話し込んでいる。小作人「小口保険ちうが出来るだって、まあ有がてえこった。ついでに凶作保険ちうのも願いてえですがね」博徒「おいらあ小口保険よりはくれえこんだ時に女房子が助かるようにお慈悲ついでに懲役保険てえのをやってもらいてえや」商人「それやあんまり勝手だ。それよりも破産保険というのはどうだろう」と、それぞれが小口保険ではなく、職業柄、自分が望む保険について好き勝手に話している。1914年4月に当時の内閣が官営の小口保険の実施を決定し、翌5月に小口保険制度調査委員会を設置したばかりであるが、同年5月28日には図11が早々と掲載されたのである。官主導の小口保険創設に向けた情勢を切り口に、北澤樂天らしい諷刺とユーモアに富んだ作品となっている。

最後に、『時事新報』への掲載年月日は不明だが、北澤樂天（2001b）から保険が登場する漫画をもう1つ紹介する。4つに区切られた円形の真ん中に「おじぎのまわりもち」と書かれた作品である。

図12の右上のコマから矢印の向きに従って順番に見ていくと、まず、ふんぞり返った実業家に対し、保険勧誘員が「どうか私の会社にご契約ください」と頭を下げている。右下では偉そうな銀行員に対して、実業家が「どうか貸し出しをお願いします」と頭を下げ、次に左下では腕組みをした保険会社重役に対して、銀行家が「どうか私の銀行に定期預金をお願いします」と頭を下げ、最後に左上では背筋を伸ばした勧誘員に対し、保険会社重

図12 おじぎのまわりもち



出典：北澤楽天（2001b）p.296。

役が「どうかお勉強なされて精々沢山契約をお取りください」と腰を折って頼んでいる。そしてまた右上のコマに戻るという流れとなっている。

ここで、「まわりもち」という言葉について簡単に説明すると、漢字では「回り持ち」と表され、「順番に受け持つこと」という意味である。つまり、図12の場合は、勧誘員、実業家、銀行員、保険会社重役が順番におじぎを受け持っているというわけである。

IV 結 び

明治から大正にかけて北澤楽天が描いた「時事漫画」から保険に関する作品を採り上げてきたが、驚くべきは保険に関する北澤楽天の情報収集量である。描かれる題材も、生命保険や火災保険の保険金に関するものから保険勧誘員、保険診査医、傷害保険、物品火災保険、小口保険といったその時折の世相を反映したもの、また「入撰保険」というような皮肉を込めたものまで産み出している。これらの漫画の中で、北澤楽天は、近代的保険制度に戸惑い、翻弄される人々の愚かさや哀しさを見事に諷刺作品として昇華させている。

北澤樂天獨特の漫畫
 天下一品の誇りなり、今や人は三伏の暑に苦
 悶し、山嵐に水瀝に、涼を乞ふ者多し。本報に清涼趣
 を讀者に送りて止まざる我、時事新報は日々掲載して、天下の
 の場を占つてゐる。時勢急変、外に、更に兩今の本
 紙毎月曜日の一頁を割きて、之を悉く
 樂天獨特のボンチ畫に提供し、或は家
 庭に、或は露臺に、萬石の涼風と清風とを常與して止まざ
 らんとす、想ふに此ボンチ買ひなび現はるゝの日、良天外遊、
 下の奇想より傳く、奇警なる諷刺と無邪氣に
 して奇拔なる滑稽とを、天下數十萬の讀者をして毎
 日笑ひの餘蘊なきを、樂せしむるものなり、敢てこれ
 二の海運報、讀者に目して、明日は明日の金三十三の紙を俟て
 日曜日の紙上から

この図13において、『時事新報』の記者は「北澤楽天の漫画は天下一品にして、又我『時事新報』天下一品の誇りなり」と評した上で、北澤楽天が世に送り出す作品について「此ポンチ頁一たび現はるゝの日、氏が天外落下の奇想より湧く、奇警なる諷刺と、無邪氣にして奇抜なる滑稽とは、天下数十萬の読者をして、毎月曜日の待遠しさに堪へ兼ねしむるものあらん」と大絶賛している。漫画というジャンルを確立し、後進の育成にも力を尽くした北澤楽天は、「日本近代漫画の祖」と言われ、2019年にはその半生が映画化もされている。文明開化によって西洋の文化が取り入れられ、それまでの伝統的な生活スタイルが大きく変化する中で、人々は北澤楽天の「奇警なる諷刺」と「無邪氣にして奇抜なる滑稽」とが織りなす漫画の数々に、ユーモアを見出したのである。

奇しくも、わが国に近代的保険制度を初めて紹介した福沢諭吉は、『時事新報』の創設者でもあり、北澤楽天の才能を見抜き、他社から引き抜いてきた張本人でもある。もちろん、そこに保険と漫画の必然的な結びつきがあるわけではないが、明治から大正という近代日本の激動期に、読者から絶大な人気を博した漫画の中で、同じく著しく発展を遂げて

きた近代保険制度が採り上げられたことは、当時の保険を取り巻く状況を知る上でもとても価値のある史料といえるだろう。

引用・参考文献

- 〔1〕 疋田久次郎（1937）「我國火災保險會社の沿革（其一）」『損害保険研究』第3巻第4号損害保険事業研究所
- 〔2〕 疋田久次郎（1938a）「我國火災保險會社の沿革（其二）」『損害保険研究』第4巻第1号損害保険事業研究所
- 〔3〕 疋田久次郎（1938b）「我國火災保險會社の沿革（其三，完）」『損害保険研究』第4巻第2号損害保険事業研究所
- 〔4〕 保険銀行時報社編（1933）『本邦生命保險業史』保険銀行時報社
- 〔5〕 稲葉浩幸（2008）『保険の文化史』晃洋書房
- 〔6〕 稲葉浩幸（2009）「諷刺漫画と保険—『团团珍聞』を中心に—」『大阪商業大学商業史博物館紀要』第10号大阪商業大学商業史博物館
- 〔7〕 稲葉浩幸（2010）「明治期の諷刺雑誌に見る保険」『商経学叢』第57巻第1号近畿大学商経学会
- 〔8〕 印南博吉編（1966）『現代日本産業発達史 XXVII 保険』現代日本産業発達史研究会
- 〔9〕 火保日報社編（1950）『損害保険変遷史 第二号』火保日報社
- 〔10〕 北澤樂天（2001a）『第1巻 時事漫画（全3巻） 明治篇』文化図書
- 〔11〕 北澤樂天（2001b）『第2巻 時事漫画（全3巻） 大正篇』文化図書
- 〔12〕 北澤樂天（2001c）『第3巻 時事漫画（全3巻） 諷刺画篇』文化図書
- 〔13〕 宮地朋果（2005）「遺伝子検査と保険」『FSA リサーチレビュー2005』金融庁
- 〔14〕 毎日出版企画社編（1981）『別冊1 億人の昭和史 昭和新聞漫画史』第31号毎日新聞社
- 〔15〕 日本経営史研究所編（1981）『明治生命百年史』明治生命保険相互会社
- 〔16〕 清水勲（2005）『漫画が語る明治』講談社
- 〔17〕 竹内一郎（2020）『北澤樂天と岡本一平 日本漫画の二人の祖』集英社
- 〔18〕 安井信夫・安井敏晃（2008）『よくわかる生命保険』保険社
- 〔19〕 米山高生（2008）『物語で読み解くリスクと保険入門』日本経済新聞出版社
- 〔20〕 米山高生（2010）「Ⅲ 生命保険業の歴史」山下友信・米山高生編『保険法解説—生命保険・傷害疾病定額保険』有斐閣
- 〔21〕 米山高生（2017）「みちくさ保険物語 画像に見る保険の歴史050：戦前の医的診査(1)初期の事例」『保険毎日新聞』2017年12月18日保険毎日新聞社
- 〔22〕 由井常彦・田付茉莉子編（1981）『近代生命保険生成史料』明治生命保険相互会社
- 〔23〕 由井常彦・田付茉莉子編（1982）『明治生命百年史資料』明治生命保険相互会社